

祇園社ぎをんのやしろ〔感神院午頭天王かんじんゐんごづてんわうと号す。天禄年中より祭祀を初て行ふ。天永二年官符を賜り、愛宕郡八坂郷觀慶寺感神院

をもつて延曆寺えんりやくじの別院となる事は、今昔物語に見えたり。延久三年三月始て行幸あり、事は扶桑略記にします。承安二年六月、上皇神与三基を進む、百練抄にあり。正殿、礼殿、神楽所、御厨所、小祠四十、薬師堂今尚觀慶寺と号す。元三大師堂、多宝塔は近世烏有に罹る、祠官の長を執行といふ、家に建仁以降綸旨、院宣いんせん、国宣こくせん、及び将家の書軸数十章を蔵む。僧房九区祠職二十余家あり。六月祇園会神幸の地四条京極にあり、当年修補に逮ふ、いにしへは烏丸五条坊門大善院だいぜんにあり、今なほ大政所町おほまんどころといふ〕

○祇園神輿洗ぎをんみこしらひ〔倭紀事に云、五月晦日生子うぶこの男女祇園社ぎをんのに詣して、各杉葉を受て禍災を祓ふ、これを茅拔と称す。夜に入て神輿三基を拜殿に出し祭式を勤む。所謂本社その中央は素盞烏尊そさのをのみことこれを大政所と号す、西は稲田姫いなだひめこれを少将井せいしょうのゐと号す、東は龍王女これを今御前と号す。大政所今御前の神輿は拜殿に出し、少将井の神輿一基は祇園町地藏堂の前まで神幸し奉り、河水を灌でこれを洗ふ、故に此名あり。此日昼より産子うぶこの人々一様の挑灯を竿頭に張て、伊達なる浴衣を着て本社へ参る、これを御迎挑灯といふ。又祇園鴨川の女伶妓婦の輩、風流に姿を優して花の盛の匂ふが如く、身には錦繡を絡ひ、あるは女も男の風俗に変わり、若も老の形となり、前はやし後囃子に糸竹の音うるはしく、これを見んとて社頭二軒茶屋、藪の下、祇園町ぎをんまちの群集は稲麻の如く、尺地の間もなかりける。又六月十八日も■物を出して群参晦日に異ならず、みなこれ神徳の余光にして平天下のいさほしなるべし〕

美しの宮人囃せ夏祓ひ

籬

鳥